

ある日の昼下がり。なしこまどんはいつものように、神社の鳥居の前でひなたぼっこをしていた。

「ふう。今日も平和どんね〜」

おもわずそんな言葉が漏れちゃうくらいのぽかぽか陽気に、すーっと眠ってしまいそうになった時、神社に続く階段からとぼとぼと一人の男の子が歩いてきた。

ランドセルを背負って下を向いて、ため息をついている姿は見るからになにか思い悩んでいるようだった。

そんな悲しそうな男の子を見たなしこまどんはひょいと身体を起こすと、見えないように透明化させていた身体をどどんと実体化させた。

「どーん！」

「うわっ！ なになに!？」

勢いよく現れたなしこまどんに男の子は目を丸くしながら目の前に現れた緑色の妖精をじつと見ていた。

「こんにちは。おれっちの名前はなしこまどん。君のお名前は？」

「えっと、僕は九条拓斗^{くじょうたくと}。いきなり現れるなんて、びっくりするじゃないか」

なしこまどんはごめんごめんと頭を掻く。

「ところで、拓斗はどうしてあんなにおちこんでいたんだもん？」

「ああ、みられちゃってたか」

なんだか、恥ずかしそうにしながら拓斗は話し出した。

「僕、最近ここの辺に引越してきてさ。この街で上手く生活できるのかなってすごく心配しちゃっててさ……もう食事もなかなか喉を通らなくて……」

「なるほど、そんなことだったどんね」

「そんなことって、僕にとっては一大事なんだぞ！」

「それなら、おれっちにいい考えがあるどん。拓斗に、この街のいい所をおれっちが自ら紹介してあげるどん！」

大きく胸を張りながら言い切ったなしこまどんはついてきてと拓斗の手を握ると、とことくと、どこかに向かって歩き出した。

「ねえ、これってどこに向かっているの？」

歩きながら拓斗はなしこまどんに話しかける。

「それは着いてからのお楽しみどん！ まあひとつ言うなら……手っ取り早くここの良さ

を知ることが出来る場所どん」

拓斗はきょとんとしながらなしこまどんの顔をみている。

なしこまどんは変わらぬ表情のまま歩き続ける。

「まあまあ、まずは向かってみるどん！ 日が沈むまでにやることを終わらせるとんよう！」

「ま、まってなしこまどん！」

もっとスピードを上げたなしこまどんを見失わないように走っていると、拓斗の息が上がつてきた辺りでなしこまどんの足が急に止まった。

「ついたどん！」

「はあ……はあ……やっと着いたの……？」

拓斗は膝に手をつきながら絶え絶えに呟いた。

一分近く休んで、ひとまず疲れの波が引いてきた頃、ようやく拓斗がその顔を上げ、目的地を見た。

「うわあ……ここがなしこまどんの連れてきたかった場所？ ところでここってなんなの？」

目の前には大きな建物が建っていて、ガラス越しの建物の中にはいろんな食べ物が並んでいて、拓斗にはただのスーパーのようにしか見えなかった。

「ここはこの街で一番大きな直売所なんだどん！ ここで売られている野菜とか、お花とか、加工品までこのあたりで作られたものなんだどん！」

「こ、こんなに？ すごいな……」

拓斗は感心した様子で直売所を外からじっと眺めていた。

「ほらほら、早く入ってみるどん！」

わくわくした様子のなしこまどんに腕を掴まれながら、二人はとことこ直売所の中へと入っていった。

中に入ってみると、地域の人たちの声がそこかしこから聞こえてくる。

拓斗の想像していた直売所のイメージよりも広くて近代的な見た目にわあっと声が漏れる。

あたりを見渡している間にもなしこまどんは手当たり次第にいろんな食材たちを買い物かごへと入れていく。

腕にかかる重みに驚きながら手元をのぞいてみると、だいこんやネギなどがかごの中に入っていた。

「ちよっ早いつてなしこまどん」

「ふふん。心配しなくても大丈夫だどん！ こう見えても食材の良し悪しを見極めるのはとくいなんだどん」

陽気に答えるなしこまどんにちよっと不安感を感じながらも、もう一度買い物かごの中をの

ぞいてみると、たしかに中の食材たちは新鮮そうに見えた。

「ま、そんなに意識しなくてもここで売っているものは全部新鮮だから誰でも安心してかえるはずだどん。それに、そこら辺のスーパーよりも安いのも特徴どんね」

「へえ……なしこまどんって何でも知ってるんだね」

「ふふん。こう見えてもずうっとこの地域の安全を守ってきたありがた〜い狛犬なんだどん。拓斗にこのあたりの良さを伝えるならおれっちより優れている人はいないって断言できるどん！」

胸を張って答えるなしこまどんは褒められたことで笑顔になりながら、スキップ交じりにレジの方へと向かっていった。

「ち、ちよつとこれ買いすぎじゃない……？」

買った食材を全部袋に入れてみると、その量は二人で食べるにしてはとて多く感じた。

「そこについては大丈夫だどん。とりあえず神社に戻るどんね」

小さな体によいしょと袋を持ちながら、なしこまどんたちはもう一度神社の方へと歩き始めたのだった。

直売所に向かった時よりも荷物のせいで数倍重く感じる足取りの中、二人はようやく元の神社へと戻ることが出来た。

なしこまどんと初めて行ったときにはまだ昼のぽかぽか陽気だったのに、気づいたら空はオレンジ色に色付き、涼しげな風が疲れた二人の身体を冷やしてくれているようだった。

「ふう……なかなか疲れたどんね。えっと、有希は……」

「あつようやく来た。おかえりなしこまどん」

神社の奥から聞こえてきた声の主はなしこまどんに近付くと頭を撫でながら拓斗の方を見た。

「この子がさっき言ってた男の子？」

「そうだどん。名前は九条拓斗くんだどん」

「へー。よろしくね、拓斗君。私の名前は安室有希^{あむろ ゆき}。気軽に有希でいいよ。普段はこの巫女さんやってたりしてるんだ」

「よ、よろしくおねがいします」

緊張した様子の拓斗に有希はニコツと微笑みかける。

「言われた通りにガスコンロとかいろいろ持ってきたけど何を作るつもりなの？」

「今日は地域の食材を使ったおいしい鍋を作るつもりだどん！」

「ふーん鍋ね。ま、いいんじゃない？」

「拓斗はどうどんか？」

「僕も多分大丈夫……かな？」

「ようし！ それなら早速作り始めるぞーん！」

みんなで神社の端っこの方へと移動し、買ってきた食材や調理器具をレジャーシートの上に広げていった。

「ところでさ、神社でこんなパーティーみたいなことってして大丈夫なの？ 神様に怒られたりとかしない？」

「そこは大丈夫だどん。おれっちが今日だけは大目に見てあげるとん」

「……なしこまドンってそんなに偉いの？」

拓斗は疑いの表情を浮かべながらじっとなしこまどんのことを見つめる。

「もっちろんだどん！ おれっちは長い間この地域を守護してきた狛犬なんだどん。神様とだって友達なんだどん」

「私もよくわかんないけど、なしこまどんがそういうなら大丈夫なんじゃない？ ほら、私に任せっきりにしないでみんなも手伝ってよ」

有希に急かされながらみんなで協力をして食材を切ったり、鍋に入れたりし始めた。

「うう……ネギかあ……」

準備をしている最中、拓斗が手に持った長ネギを見ていやそうにほつりと呟いた。

「拓斗はネギが苦手なんだどん？」

「うん。ちよっとね。どうしてもネギの辛味とかが好きになれなくてさ……あんまり食べれないんだ」

「ふーん。そういうことなら、むしろネギを買ってきたのはよかったんじゃない？」

有希がなしこまどんに対して目くばせをすると、なしこまどんはよいしょと声を出しながら自身の首に巻いてあるマフラーを脱いで拓斗のほうに見せつけた。

「このマフラーはいま拓斗の持っているネギと同じ矢切ネギって名前のネギなんだどん！ このあたりでは有名なブランド野菜なんだどん」

拓斗はへえと声に出しながら手に持ったネギに視線を向けた。

「たしかにかなり太くてボリューム感があるけど僕が気にしてるのはそこじゃなくて……」

「へへ、矢切ネギの良さはそこだけじゃないどんね」

「拓斗、ちよっと口開けて？」

拓斗は有希の言葉に反射的に口を開くと、いつの間にか切られていたネギのかけらをひよいと口の中に入れられた。

「ちよっ！なんですかいきなり！」

「いいからいいから食べてみ」

吐き出すわけにもいかずおそるおそるかじってみると、想像と違った感覚に驚きながらかみしめる。

「あ、甘い……？」

「そ。このネギはほかの品種に比べてすごく甘いんだよね。どう？ 大丈夫そう？」

「……はい、多分これなら大丈夫だと思います！」

「それならよかったどん！ ほかにもいろんな特産物を用意したからたのしみしておくどん！」

それからというもの、なしこまどんと有希による買ってきた食材たちの特徴の講座を聞きながら準備をしていると、いつの間にか準備は終わっていた。

「いよっし！ 完成っと！」

陽気な雰囲気の有希が蓋を開くと、大きく湯気が立ち上がりながらいろんな食材たちが湯の中で踊っている姿がのぞいてきた。

「いいかんじどんね！ 成功だどん！」

「ほら、早速食べてみてよ」

そういつて有希は拓斗に鍋をよそった小皿を渡した。

拓斗は小皿を受け取ると、ちよっと抵抗感を感じながらふと二人のほうへと視線を向けた。

「大丈夫だどん！ おれっちたちが見守っておくから思いっきり挑戦してみらどん！」

「う、うん！ いくよ！」

再び意気込んでがさっと取った食材たちを一気に口の中へと頬張った。

「ど、どう？」

なしこまどんと有希が拓斗の顔を物珍しそうにのぞき込むと、拓斗は思い切り顔を上げた。

「うん、おいしい！」

拓斗の顔には、昼頃の暗い表情はなくなり、満面の笑みがこぼれそうほど満ちていた。

「よかったどん！ すっかり拓斗も笑顔になってくれて、おれっちもうれしいどん！」

「ふう、ちゃんと作れてよかったよ。ほら、しっかり食べなさい」

それからなしこまどんと有希も一緒に鍋を食べ始め、数十分がたったころにはいつの間にか鍋の中はすっからかんになっていた。

デザートとしていちごや梨も用意してあって、拓斗は満足感に包まれていた。

「どうだったどん？ ちよっとはこの辺りのことをわかってくれたどんか？」

なしこまどんの問いに対して拓斗は残った梨を一口頬張りながら答えた。

「うん。今までこうやって地域の特産品とかについて考えたこともなかったけど、こうやっていっぱい理解するとなんだか怖く無くなってきた気がする！」

「ふふ。それは良かったどん！」

拓斗はよしと意気込むと元氣いっぱいランドセルを背負った。

「それじゃあ僕はそろそろ帰るよ！　～人とも今日はいろいろ助けてくれてありがとう！」

「こちらこそ楽しかったよ」

「気をつけて帰るんだーん！」

大きく手を振りながら帰る拓斗に合わさるように太陽は街全体をきらびやかに照らしていた。残ったいちごを口に放りながら有希が語りかける。

「良かったねなしこまどん。あんたのこの街への愛が伝わったみたいでさ。大手柄じゃん」

「おれっちはただこの街のありのままを拓斗に伝えただけだどん。つまりはこの街が、拓斗の大好きな街だったただけだどん。そんなみんなが好きになれる場所だからこそ、おれっちはずっとずっとここが好きなんだどん！」

胸を張って答えるなしこまどんに有希はポンポンと頭を撫でる。

「そうだね、私もこの街が好きだよ」

次の日、学校の扉を開ける拓斗はいつもよりも上を向いていた。昨日よりも広々とした教室に入ると、先に来ていたクラスメイトの輪に近付き、元氣よく喋りだした。

「おはよう！　聞いて聞いて！　昨日実は面白いことがあってさ！　小さな狒犬にこの街の魅力を教えて貰ったんだ！」